

フィリピン語研究最前線



海外交流

宮 脇 聡 史*

Forefront of Philippine Studies

Key Words : hybridity globalization, post-colonial,
multilingual condition, Christianity

1. フィリピン地域研究へのアプローチ

フィリピン地域研究へのアプローチは主に三つに分かれる。ひとつは既存の人文社会分野（時には農学等の自然科学分野からの参入もある）の個別事例研究としてのアプローチ、ふたつ目にはフィリピンより広域のアジア研究、あるいは東南アジア研究における比較地域研究的なアプローチ、三つ目にはフィリピンという地理的範囲における多様な事象をできるだけ相関するものとして総合的に捉えることを重んじるアプローチである。

2. フィリピンをめぐる学問上の問題

フィリピンに関する研究は長らく主に第1、第2の観点から行われてきた。第1のアプローチで問題になるのは、欧米や先進国の社会モデルに基づいて形成され、アジア諸国の発展とともにバラエティを加えてきた社会・文化モデルの妥当性である。ここで主に問題になるのは16世紀よりスペインによる植民地支配を受け、19世紀にはイギリスによる自由貿易帝国主義のもと商業資本主義化が進み、20世紀前半にはアメリカの植民地下で教育・政治制度の近代化が進められたフィリピンはどのような社会モデルと適合するのか、という問いである。標準的

なモデルにもアジア・モデルにも、そしてスペイン支配という共通の過去を持つはずのラテンアメリカ・モデルともしっくりいかないフィリピンの政治・経済の発展状況は、地域固有の研究を要請する大きな理由となる。

地域の固有性を捉えるための学際的アプローチたる「地域研究」は冷戦の文脈でアメリカを中心に発展してきた。特にインドシナ状況を反映しつつ「東南アジア地域研究」は時代の要請とこれに対する同調や反発の中で発展してきた。この広範囲の、大戦まで植民地統治において分断され、言語も文化も社会も宗教も多様な地域について、なお「多様性の中の統一」を見出そうとする努力は、東南アジア地域研究の一つの特徴となり続けてきたが、そこには地域固有性への強い要請があった。しかし、強い冷戦の地場の中でアメリカ的な戦略と、それに対するマルクス主義の影響を強く受けた反発の流れは、東南アジアの固有性の問題と自ら引き受けた研究を進展させていく原動力とも障害ともなった。フィリピンには「アジアで唯一のキリスト教国」「アジアで最も早い民主主義国」「アジアで最も早い独立民主主義を掲げた国」といった特殊性に基づくいわば「文明の伝道者」的な自負が、特に知識人層を中心に根強く形成されてきていたし、歴史的に植民地化以前の固有文化の発見から他の東南アジア地域に積極的に連結していく契機が今一つ強くなりきれなかった。東南アジアに関する学問的な議論の中にフィリピン研究は常に加わったものの、あまりにしばしば例外扱いとなってきた。

3. 狭義の「フィリピン地域研究」の成り立ちと言語の問題

第3の観点、つまり狭義の「フィリピン地域研究」



* Satoshi MIYAWAKI

1969年4月生

東京大学大学院総合文化研究科（国際社会科学）修了（2003年）

現在、大阪大学大学院言語文化研究科

言語社会専攻 准教授 博士（文学）

フィリピン地域研究、宗教社会学

TEL : 072-730-5281

FAX : 072-730-5281

E-mail : miyawaki@lang.osaka-u.ac.jp

はそうした中で、上記の2アプローチからの研究者も加えつつ、現地語の知識と運用力及び歴史的背景に関する批判的理解を踏まえた研究のあり方として、特に政治学、人類学、歴史学を主軸に展開する道に向かった。この地域研究の展開に特有の問題として言語の問題があった。フィリピンには一方で首都マニラを中心に長らく強い影響力を持ち、やがて国語（フィリピン語）の土台となったタガログ語以外にも、北部地域の共通語であるイロカノ語、南部地域の共通語であるセブアノ語が地域社会ではなおも決定的に重要であり続け、さらに100を超えると言われる多様な言語集団に分かれている、という事情がある。

また、数多くのゆるやかなかわりしかなかった小国家群であったこの地域はスペインの植民地統治で初めて「フィリピン」の名と共にまとまりを得、やがて独立運動に至るナショナリズムも、その言語と文化の強い影響のもとに育まれてきた。歴史研究において公文書を中心とした一次資料を用いる場合にはスペイン語の知識が不可欠である。

さらにそのスペインに代わって英語を公用語としたアメリカの教育政策によって、特に高等教育や学問は英語に支配され、公的な資料の大半は今や英語となり、英語である程度まとまった研究が出来るため、上述の最初の二つのアプローチでの研究も容易と考えられがちになった。加えて主要な歴史資料は体系的に英語の翻訳資料としてまとめられており、編集者の名前によってBlair & Robertsonと呼ばれるこれらの英語資料集に多くの研究が依拠することとなり、スペイン語の原資料があまり顧みられない傾向が長らく続いた。以上の傾向は、フィリピンの政治、社会、文化の固有性に関する植民地主義的な眼差しを引き継ぐことともつながり、「フィリピン社会は近代化を表面的に取り入れつつも、実際には「怪しい」伝統的な文化を本音として持っており、両者を操ることで腐敗した社会を形成する傾向を抜きがたく持ったまがい物である」という一方的な観点での分析が蔓延した。

4. フィリピン地域研究の展開

そうした傾向は今も残るものの、現地語の知識に基づく地道な地域社会・文化の研究はスペイン時代より連綿と続けられてきた。これを踏まえ、歴史研

究においてもまずはアジアの独立民族主義の影響を受け、19世紀末の独立運動を再評価した歴史研究がサイド、アゴンシリョ、そしてマルクス主義による独自の体系的な視点を加えたコンスタンティーノによって発展させられてきた。このナショナリズム的な傾向は新興の発展途上国たるフィリピンの学風の不可欠な一角をなす。

同時に古くからの植民地支配を通してグローバル化の波に早くからさらされてきたフィリピンでは、留学、移民などの増大の中で、新たな学問潮流が起こった。ベトナム戦争を契機に、在米アジア研究者たちの運動も加わって批判的な学問的潮流を加えるようになったアメリカの東南アジア研究が、その重要な起点となった。エリートと庶民、欧米の支配者とアジアの民衆、伝統と近代といった二分法を前提とした単純なナショナリズムではなく、人々がスペイン人宣教師から教えられながらも、自分たちの言葉で自分たちの仕方で語り継いできたキリスト教受難詩のことばが時間をかけて熟成されたものこそが、やがて19世紀末に社会に革命の激震をもたらす根本的な言葉を生み出す母体となっていったことを、これまで顧みられることのなかったタガログ語のテキストをふんだんに用いて鮮やかに示したイレートの研究は大きな話題を呼んだ。その出版後数年を経て、マルコス大統領による権威主義統治下に沈黙していたかのようにあったフィリピンの人々がアキノ元上院議員の「殉教」に应えて立ち上がり、数年後にはマニラ大司教の呼びかけに应えて多くの人々が聖像を担ぎながら非暴力の民衆蜂起に参加することによって民主化を勝ち取った時、大学人や教会人の多くはイレートの研究を再評価した。

5. フィリピン地域研究の今

民主化以降のフィリピン地域研究の潮流は、ポストコロニアル批評の影響を受けた歴史の再吟味、現地語によるフィールドワークの活発化、スペイン語原資料による調査の進展、ポスト構造主義の社会哲学の影響を受けた政治・社会理論を活用した政治学、社会学、人類学による調査研究の進展などがある。また英語による学会発表や論文、著書がまだ主流だが、国語によるものも確実に増加している。ここで、いくつかの興味深い流れを挙げることにする。

ひとつは在外フィリピン人や移民に関する研究の増大である。特に出稼ぎ労働者や国際結婚の増大という現実に対する対応でもあるが、研究自体も研究対象も大きく国境を超え、多彩な共同研究が精力的に進められている。

民主化後の新憲法下における法的基盤の強化と共に活発な活動を見せる NGO や市民社会に関する研究も広範にみられる。同様に憲法、及び 1991 年の地方政府法によって強化された地方自治体に関する研究も活発に行われている。

戦後 50 年の 1995 年を契機とした、日本語資料を活用した日本占領期の研究が、特に日本人研究者によって精力的に進められている。1996 年に名古屋で始まったフィリピン研究会全国フォーラムも毎年日本各地で開かれ、今年は静岡で 20 回目の開催となり、フィリピン人を含め多くの参加者を集めた。国際フィリピン学会の東アジア大会も 2006 年の東

京大会以降 4 年ごとにつくば、京都で開かれている。近年の日本人研究者のフィリピン研究の世界での活躍は明らかで、学会や研究誌を通じての英語での発信、フィリピンをはじめとする諸外国での研究教育活動への参加も増えている。

筆者自身も関わっている宗教に関する研究も、これまでの土着の宗教慣行の人類学的調査や教会の政治関与問題への政治学や神学的な調査などの限定されたトピックを大きく超えて広がっている。プロテスタントの目覚ましい成長、カトリック教会の活発な活動と信徒運動の活性化、新興諸宗教のプレゼンスの高まり、イスラム教徒の活発化、そしてそれら全体のグローバルな宗教復興の流れとの相互作用などが、既に挙げたフィリピン社会の中でハイブリッドに形成された霊性に関する解釈論と絡み合いながら、盛んに論じられるようになっている。

